



羅針盤

2015年度 第13号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

2015（平成27）年12月9日発行

私たち教師は、将来の展望が現在のモチベーションにつながると考える傾向にある。だから、面談でも学友に、将来の夢や希望についてたずねる。どうしたいと思ってる？ と。返ってくることばに応じて、進路のアドバイスを。立ち往生するのは、「そんなのありません」という場合である。「自分で自分が何をやりたいのか分からない」という場合もある。

そんな時は、元同僚の養護の先生が教えてくれた質問をする。

「10年後の自分を想像してごらん。このままだとどうなる？ どんな自分になっていたたい？」

その先生は、生きる道に迷って保健室に来る生徒にそう聞く、と教えてくれた。それを端緒と一緒に考えるというわけである。真似をしてうまくいく時もあったけれど、最終的に「もうしばらく、将来について考えよう」と、結論を保留することもあった。

ただし、夢や目的を語る学友にしても、それが、必ずしも一生を貫くとは限らない。誰でも分かっていると思う。今の目的のために頑張るって手に入れた能力は、軌道修正したあとの夢の実現にも寄与する。諦めても、すべてリセットするわけではない。取り敢えずでいいから、現在の希望を見つけてごらん。そんなふうアドバイスすることになる。それほど間違っていないと思う。

なれるもんになる ～夢と目的～

10月17日のNHK-Eテレ「SWITCHインタビュー^{たつじんたち}達人達^{しゅつしやく}」は出色であった。ロボット工学者石黒浩とのまね女王清水ミチコの組み合わせ。石黒は、マツコデラックスのアンドロイドを作製した大阪大学教授である。

清水が「はじめから研究者をめざそうと思ったんですか」と聞くと、石黒は「いや、目的なんかありません。夢なんかありません。僕は夢持ってるっていう人は嘘ついていると思っている」とけんもほろろ。

清水が閉口しながら「そんなことないです。理想とか、いつかモデルになるとか…」と反論を試みると、石黒は「そういうことはいえるかもしれないけれど、大抵の方は、なれるもんになる、というのが正しいんです」とズバリ。

清水は思わずカメラに向かって「子どもたちはテレビを消して」と苦笑い。すると石黒は冷静に「夢ってのは将来を狭めると思ってるんです」と不意を衝く。

清水が「はあ、逆に？」と関心を見せると、「うん。それしかできないとか、それにしかなりたくないと思ったら、他にもある可能性を全部潰すかもしれない。だから、小さい時の夢なんて適当でいいんです。

『なんとなく何々になりたい』ぐらいは思ってもいいかもしれないけれど、あまり強く思わないほうがいい。で、勉強すればするほど、新しい夢がいくらかでも出てくるので、沢山あったほうがいいわけです。客観的に言えばね。ほとんど意味がないわけです！」と、石黒節炸裂。

清水があまりの逆転発想にあきれ狼狽しながら「まあね…。子どもは無限大みたいにいるけれど、限られてますね」と辛うじて口を挟むと、また「いや、子どもの持っている情報は限られていますよ。子どもの持っている情報が無限大だったら、最初っから天才ですよ！」とぼっさり。

とうとう清水は「子ども番組にはとにかく向いてないですね」と言い放つ。すると意外にも「高校生は喜んでくれますよ」とぼつり。

一瞬清水の表情が軟化する。石黒は続ける。「高校生ぐらいになると悩み出すわけですよ。それまではずっと『命には価値がある』と言われてきたんだけど、ほんとに自分にどれだけの価値があるのか。たとえば、隣の奴と比べると、何ひとつ勝てる場所がないのに、自分の生きている価値ってほんとにあるのかなのかって、思い出すじゃないですか。その時に、人の絶対的な価値は…、冷静に考えたらないんですよ。だけど唯一言えることは『自分の命の価値を探すために生きることにはできるわけで、僕だって自分の命に生きる価値があるかどうかを探している。だからあんたもそうしなさいっ！』て言うんですよ」

清水は口をとがらせながらうなづく。石黒はさらに続ける。「だから最初から命の価値があるとわかったら、後は犬や猫のように寝て暮らせばいいじゃないですか。でも、それって人間らしいですか？っていうことです」と言ったら、清水はとうとう「いいこと言いますね」と相槌をうって「はじめっから、『無価値かもしれないけれど、ゼロから始める』って言ったほうがやる気になりますものね」と同意すると、石黒は勢いを増し「命に絶対的価値があると言ったら、後は寝て暮らせばいいだけでしょ。仕事なんかしないでいいんでしょ。なんにもやる気なくなっちゃうじゃないですか！」とまくし立てる。が、とうとうエネルギーを使い果たしたのかもしれない。ふと我に返ったように「でもね、小学校や中学校の子どもには、まだ希望をもって勉強してもらわなきゃならないので、嘘でもそういったほうがいいわけですからけれども…」と呟くのであった。

最後は尻^{すば}疋^ぽみになってしまったけれど、「なれるもんになる」というメッセージは強烈であった。夢や目的をつかみきれないでいる学友にとっては光明になるのではないか。確かに現実的な夢や消極的な目的には、その人の可能性を限定し、狭める側面がある。それならいっそ、無目的のまま、勉強や練習などによって自分のスキルを磨き、可能性を押し広げ、自分の命の価値を探せばいい。夢信仰や目的本位主義に立つ必要はないのである。

そういえば、山崎正和が、技術と芸術を対比するくだりで、つまり夢とも希望とも無関係なくだりで、「人はしばしば自分の能力に合わせて自分のしたいことを発見する」（山崎正和『社交する人間——ホモ・ソシアビリス——』（中公文庫、2006）120頁）と述べていた。同断^{どうたん}といえよう。

新聞のコラムから

ひと——肉体労働を重ね、弁護士になった——豊川大智さん(32)

大阪市内の中高一貫校に入った。しかし、なぜ勉強するのか分からない。もやもやしていた14歳のとき、個人事業主の父親が巨額の不渡り手形をつかまされた。

「おれも仕事せな」。中学校に通わなくなり、アルバイトをする。通信制の高校に移ってからは、建設の日雇い仕事をしていた。

19歳になる直前、現場で足に大けがをした。みんなに迷惑をかけたと落ち込んだ。ところが、労災補償の権利があると知り、驚く。「このまま何も知らんと社会に出てたらどうなったんやろ」。法律を学ぼうと決めた。

一度決めたら頑固^{がんこ}だ。中高の勉強を半年でやり直し、青山学院大に受かった。関西大法科大学院卒業後も、建設現場に出ることがあった。司法試験を目指し、「1秒も無駄にでけへん」。休憩時間には、足場の上で六法全書を開いた。

2度目の挑戦で合格。三重県で稲刈りの手伝い中にスマートフォンで発表を見た。29歳のときだ。

弁護士になったいま、倒産^{せとぎわ}の瀬戸際の相手に会うと父親の顔を思い浮かべる。学校に行かず万引きを繰り返す少年には、勉強に興味のなかった自分の姿が重なる。「気持ちや、よお分かるんです。こんな経験したやつは少ないでしょう。倒産がらみと少年の事件に関しては『ほかの弁護士とはちょっと違うで！』という気持ちで臨んでいます」（文 磯村健太郎、「朝日新聞」2015年11月13日朝刊）

肉体労働の経験ややんちゃな寄り道でさえも、生き方によってはその後の人生のプラスαになるのである。

池井戸潤『下町ロケット』（小学館、2010）に、理系の知的財産（特許）に詳しい弁護士神谷修一が登場する。池井戸に法律面で協力した鮫島^{さめじま}正洋は、神谷そのまま、現実の特許を多く扱う弁護士である。鮫島は、もともと理系、東京工業大学金属工学科出身で、藤倉電線や日本IBMに勤めながら法律を勉強し、弁理士から弁護士へと進んだ異色の存在である（「朝日新聞」2015年11月20日朝刊）。世の中には、理系出身者も弁護士も沢山いるけれど、両方を兼ね備えたとき、希有な存在になる。

とはいえ、豊川大智さんも鮫島正洋さんも、弁護士としてのオリジナリティを求めて、寄り道をしたり、理系の大学に進学したわけではない。が、「しくじったからもう駄目」とか「理系だから社会科はいらない」なんて考えていたら、彼らは存在しないことになる。

浅はかな考えで、能力や未来を安く見積もってはいけない。今は、自分の可能性をできる限り広げる時である。